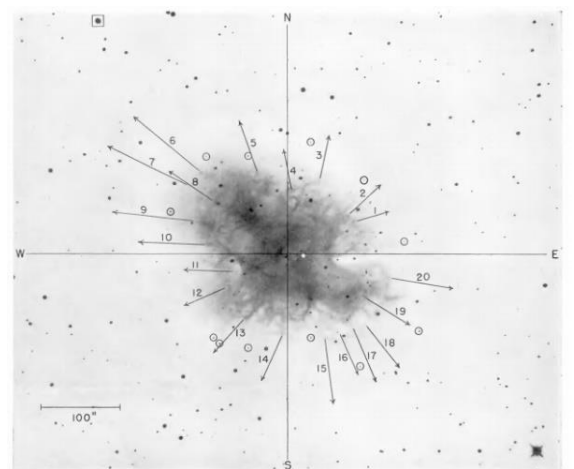




かに星雲シリーズ:その4 超新星とかに星雲

「かに星雲」が^{ちょうしんせい}超新星の^{ざんがい}残骸であることは、今ではよく知られています。そのことに^{じんるい}人類が気が付くまでには多くの人達の^{かく}努力が隠されています。

「かに星雲」が変わった天体であることは、1920年代の天文学者の間では話題となっていました。見た目は^{ふつう}普通の星雲のようですが、どうも^{もう}猛スピードで形を変えているようなのです。多くの天文学者が考えあぐねていた頃、日本人アマチュア天文家の



かに星雲の膨張(1938年)
Duncan(1939) ApJ 89 482

^い 射場^ば保昭^{やすあき}が日本に古くから伝わる天文現象の^{げんしやう}記録^{きろく}をまとめて、アメリカの天文雑誌に投稿しました。雑誌の^{へんしゅうしゃ}編集者は記事の^{ぼうとう}冒頭^{えいご}で、「射場の英語は普通に使われているものと違うが、^ご誤解^{かい}を生じる^{おそ}恐れはないので、そのまま^{けいさい}掲載^{ちゆうしやく}する」という注釈を付けています。記事では、「おうし座^{ぜーた} 星のすぐ近く(「かに星雲」の場所です)に、1054年に新星が現れ半年近く見えていた」という明月記の記録が紹介されていました。これを読んだ天文学者たちは、これは「かに星雲」の昔の姿だとすぐにひらめきました。ルントマルク(スウェーデン)、メイオール(アメリカ)、オールド(オランダ)といった天文学者たちです。さっそくこの星雲の^{ぼうちやう}膨張が詳しく調べられ、およそ800~1000年前には一点に集まってしまうことが示されたのです。こうして、超新星は新しい星の出現ではなく、星の最後の^{すがた}姿なのということが分かり始めました。プラネタリウムではこのような話はほとんどできませんが、発見にはそれぞれのドラマがあるのであります。

2020年12月15日記 (解説員: 田部一志^{かいせついん たべいし})